

Georg Büchner の *Woyzeck* について (I)

— 創作技法を中心に —

浜 本 隆 志

序

ドイツ文学史上特異な作家である Georg Büchner (1813—1837)。彼ほど時代の推移とともに、種々に評価され、位置づけられてきた作家も少ないであろう。既存の Büchner に関する評価のうち、重要なものの概要を列挙すれば、およそ以下のとおりである。

1. 決定論的視点から社会の暗黒面を描写した、自然主義作家の先駆者とみなすもの。例えば P. Landau¹など。
2. いわゆる「ドイツ内面性」の視点から、Büchner 文学のなかに、ニヒリズムの深淵や現代人の危機意識の深みを、形而上学的に見極めようとするもの。例えば K. Viëtor²など。
3. 審美的視点から、Sturm und Drang の流れを汲む、後期ロマン派につながる側面を強調する解釈。例えば F. Gundolf³ など。
4. 宗教的立場から解釈するもの。例えば W. Martens⁴ など。
5. K. Jaspers 流の精神分析的な解釈をするもの。例えば R. Mühlher⁴など。
6. Büchner の社会活動と、Büchner 文学の底に渦巻く変革への情熱に問題点をしぼり、社会的、歴史的観点から解釈するもの。例えば H. Mayer,⁵ G. Lukács,⁶ H.M. Enzensberger⁷ など。

これらの解釈の多様性は、Büchner 文学のカオスや深淵、高度に研ぎ澄まされた現代意識、その屈折した複雑な世界像などに由来するものと言えよう。拙論で論及するのは、未完の作 *Woyzeck* であるが、その際、自然科学者であり社会活動家であった詩人 Büchner のこの作品を、アウトノームな意味で、その全体像との有機的、弁証法的関連のもとに見極めることが、研究上の不可欠の前提であろう。このためには、相互不可分な関係にある以下のモメントをとりあげる必要がある。

1. 時代的背景と Büchner の社会活動。
2. *Woyzeck* の素材。
3. *Woyzeck* の創作技法。
4. *Woyzeck* における疎外の問題。
5. *Woyzeck* におけるニヒリズムの問題。

以上のパースペクティブより、この *Woyzeck* の全体像を把握し、作品の根底を貫く詩人の高度の現代的自覚に肉迫することが、拙論の眼目である。なお紙面の都合上、本稿では上記のモメントのうち、1—3をとりあげることにする。

I 時代的背景と Büchner の社会活動

H. Heine は *Die Romantische Schule* のなかで、次のように言っている。

「Goethe の死とともに、ドイツでは新しい文学の時代が始まり、また Goethe とともに古いドイツは埋葬されたのである。つまり Goethe とともに文学の貴族の時代は終焉し、デモクラシーの時代が始まる……」⁸

この Heine の有名な言葉に、端的に表現されているように、1830年代は激動の時代であり、Tatepoche はここに始まったと言わねばならぬ。また Hegel の死（1831年）とも相まって、Idealismus は過去の遺産となり、新しいリアリズムの思潮が抬頭してきた。要するに、時代は大きな

転回点をむかえたのであった⁹。その背景をなすものは、自然科学の発達、近代都市の成立、フランス革命などである。当時イギリス、フランスでは、産業革命を経て資本主義が発達し、新興ブルジョアジーが政治的、社会的主導権を持つに至った。そして同時に、やがてその歴史的使命を担うべきプロレタリアートも勃興しはじめた。

だが、ガリアの雄鳥が時を告げているにもかかわらず、ドイツでは夜の帳はまだおりたままであった。当時のドイツは、人口の大部分が農民と手工業者で、彼らは中世的封建体制に編入され、かつ政治体制も、いわば Metternich の反動政策の縮図のごときのものであった。ライン地方を除き、ドイツブルジョアジーは未発達で、まして農民・手工業者達は、自己の歴史的使命に関する真の自覚を持たず、きわめて無気力なままであった。彼らの反政府運動といっても、暴動の形式で発生する程度で、たえず分裂していたため、組織的な行動を起こすには至らなかった。このような前近代的な後進国であった当時のドイツは、ユダヤ人的直観に支えられた Marx の端的な指摘にしたがうならば、「歴史の水準以下」¹⁰であり、「一切の批判の水準以下」¹⁰の状態であった。

この1830年代のドイツの惨状をまのあたりに見てきた Büchner が、大学時代の前半をフランス領 Straßburg で過し、フランス革命の自由主義思想の洗礼をうけたのは、彼の人生において決定的であった。それが彼の革命運動の出発点を形成していると言えよう。「大衆の必然の窮状」¹¹が変革と解放のモメントであることを見抜いた Büchner は「貧富の関係がこの世の唯一の革命的要素です。飢えだけが自由の女神になりうるのです。」¹²と述べているが、この経済的側面の洞察から理解されるように、彼はきわめて現代的発想をもった詩人だったのである。

Lukács にしたがって位置づければ¹³、思想的には、機械論的唯物論から Marx らの主唱する弁証法的唯物論への過渡期に生きていた Büchner は、当時大きな思想的影響力を持っていた Heine, K. Gutz-

kow, L. Börne らの「青年ドイツ派」にも属していなかった。Büchner は彼らのように「イデーや教養階級によって」¹⁴ もまた、「時事文学」¹⁴ によっても、社会を変革できるとは考えていなかった。知識人による変革の限界を、このように鋭く洞察した Büchner の社会変革に関する視点は、以下の二つに要約される。すなわち「物質的貧困」¹⁵ と「宗教的ファナティズム」¹⁵。これらはそれぞれ、唯物論的視点と、狂気、混沌、情念、怨念等の Pathos 的視点に置き換えてもさしつかえないであろう。前者は言うにおよばず、後者に関しても、彼の *Dantons Tod*, *Lenz*, *Woyzeck* の根底を流れる、ルサンチマンと符合するものを持っていることから明らかに、この二つの視点は、Büchner 文学理解のいわば基軸をなすものである。

Darmstadt の法律で、大学時代の後半をドイツで過すことを余儀なくされ、故郷 Hessen に帰った Büchner は、前述のドイツの惨状や偏狭な田舎政治を見て、一面悲痛な心境にあった¹⁶。が、反面フランス啓蒙思想や、社会主義思想に裏打されていた彼は、「あばら屋に平和を、宮殿に戦争を！」¹⁷をスローガンにかかけ、ドイツの惨状の変革を真剣に考えていた。かくして彼は *Der Hessische Landbote* を起草したのである。この作品の根本思想は、次の言葉に端的に要約される。

「お偉方の生活は長い日曜日だ。やつらは美しい家々に住み、きらびやかな服を身にまとい、血色のよい顔をし、独特の言葉をしゃべる。……百姓の生活は長い労働の日だ。外国人達は百姓の眼前で、百姓の畑を食いあらす。百姓は身をタコにし、その汗はお偉方の食卓の塩なのだ。……秩序のなかで生きることは、飢えることであり、皮を剥がれることだ。」¹⁸

この政治的パンフレット *Der Hessische Landbote* (1834年) は、アンガージュマン文学の先駆的価値を持つものである。Enzensberger は当時のドイツの社会的、歴史的背景を詳細に分析し、このパンフレットの現代

性について、次のように述べている。

「1834年には田舎政治であったものが、現代では世界政治となっている。Gießen 大学生 (Büchner) と Butzbach の田舎牧師 (L. Weidig) が書いたものは、今や百万人の人々の問題である。1964年に *Der Hessische Landbote* をあてはめると、……近東、インド亜大陸、東南アジア、アフリカの大部分、ラテンアメリカの多くの国々に、有効性を持っている。」¹⁹

このように *Der Hessische Landbote* は、当時のドイツの田舎政治に深くかかわるとともに、それをはるかに越える視界をもっていた。ここに Büchner 文学が今日になって、大きくクローズアップされる必然性があると言うべきであろう。

Der Hessische Landbote は秘密印刷され、農民に配布された。けれども、このパンフレットを見つけた農民は、蜂起するどころか先を争って警察へ届けでた。これを聞いた Büchner は、ドイツ革命の希望を失って、政治から身をひくのである。彼を挫折させたのは、あの天才 Goethe の反抗的抵抗力をもってしても、どうにもならなかったドイツの惨状なのである。早咲きの花は、当時のみじめな土壌には育たなかった。F. Engels の言うドイツ古典主義の継承者として、歴史を動かす指導者にはなりえなかった Büchner は、フランスと比べてみたとき、あまりにも目につくドイツ民衆の政治意識の低調さを知って、ドイツ革命を諦観し、絶望の深淵に陥らせねばならなかった。ここにドイツ解放運動における、詩人の孤独と憂愁の悲劇がみられる。が、これは単に Büchner のみならず、Heine, Börne, H. Mann, T. Mann, Enzensberger らにとっても、宿命の根本体験であり、最もドイツ的な問題なのであった。

この Hessen での革命運動への参加は、彼の創作活動の際にも、文学上の体験的具體性として、作用したのである。H. Mayer は「*Woyzeck* もまた Büchner の Hessen での体験の結実である。」²⁰ と指摘しているが、

それは *Woyzeck* を社会的、歴史的観点から、有機的に把握しようとするものとして注目に値する。また Mayer は、Büchner の作品相互の関連性について、次のように言う。「*Der Hessische Landbote* や *Dantons Tod* と同様、*Woyzeck* にあっても、環境による人間存在の従属という、同じ問がたえず問題になっている。」²¹ この意味からも、*Woyzeck* との関連をより具体的に理解するために、次の *Dantons Tod* の根本思想を引用したい。

「Muß (必然) ということ誰が言ったのか？われわれの内奥で嘘をつき、淫売し、盗みや人殺しをするものは何か？われわれは見知らぬ力によって動かされている操り人形だ。われわれ自身は無だ、無なのだ！」²²

この Danton の科白に端的に表現されている、宿命観やニヒリズムが、*Dantons Tod* の底流を貫いており、これらが種々のヴァリエーションとなって、*Woyzeck* の根本思想の一つを形成しているのである。では、これらが *Woyzeck* で如何に表現されているかを、具体的に考察してみよう。まずはじめにとりあげるのは、素材である。

II *Woyzeck* の素材について

Woyzeck の素材となったのは、現実に発生した殺人事件²³ であるが、その概要はこうである。1821年6月21日、散髪屋 Johann Christian Woyzeck は嫉妬のあまり、未亡人である愛人 Woost を刺殺した。彼は41歳、愛人は46歳。彼女は女盛りも過ぎ、さして美貌というほどではなかったが、兵士や見張番など男から男へとわたり歩く浮気な女であった。Woyzeck はたやすく彼女をものにしたが、自分のもとにひきつけておくことができなかった。彼女は確固たる地位もないおちぶれた Woyzeck に見きりをつけたので、彼は復讐のため犯行におよんだのである。Woyzeck の生い立ちや略歴は以下のとおりである。

彼は1780年、Leipzig で誕生。幼い頃結核で両親をなくした彼は、ろく

に学校にもゆけず、鬻師の徒弟となった。が、生来投げやりで落着きのなかった彼は、18才のときその職を捨て、放浪の旅に出た。ある時は召使や看護人に、また他の時には散髪屋や傭兵になった。けれども確固たる職業に定着できなかった彼は、各地を渡り歩いて怠惰な生活を重ねたのち、1818年、故郷 Leipzig に帰り、Woost 未亡人と知合いになった。その後の結果は前述のとおりであるが、Woyzeck は一面、革命、反革命、戦争、講和、国家の興廃などの巻にあった Wien 会議当時の混沌たる時代の運命に弄ばれた、みじめな存在であったと言えよう。

凶行後 Woyzeck は逮捕されたが、彼には以前から精神錯乱の徴候があったと新聞が報じたので、精神鑑定が認可された。診断にあたった Clarus 博士はこう述べた。Woyzeck には「多くの道徳的荒廃」²⁴がみられる反面、「如才がなく熟考力を備え、すばやい理解や正確な判断」²⁴が確認される……と。この見解によれば、被告は精神錯乱ではなく、犯行の責任能力を持つものであった。かくして1822年11月13日、Woyzeck に死刑の判決が下された。

だが、懺悔聴問僧は、Woyzeck には明らかに精神異常があると報告している。と言うのも、Woyzeck は僧に獄中で、幻覚について語ったからである。彼の告白の内容は次のようであった。自分はフリーメーソンに追いかけてまわされたり、天空に三つの火の玉が見えるという幻覚に悩んだ。丁度犯行の前にも「Woostin を刺し殺せ！」²⁵や、「さあやれ、そらやれ」²⁵という幻聴があり、「自分はそんなことはできない」²⁵と言い聞かせたが、「お前がそれをやるんだ！」²⁵という声が返ってきた……と。

そこで処刑は延期され、再度 Clarus 博士が彼の診断にあたり、2ヶ月間精密な観察がなされた。今度 Woyzeck は、捨てた恋人や子供への後悔、兵役の苦勞、上官の虐待や嘲笑、„guten Menschen“²⁶ という安っぽい同情などについて告白した。またもや Clarus 博士の診断は、幻覚は血液の循環が阻害されたために発生したものにすぎず、Woyzeck には

犯行の責任能力があるとの結論であった。異議申立は却下されて、ついに Woyzeck は1824年8月21日、公開の場で斬首刑に処せられ、みじめな人生の幕を閉じた。

以上が素材となった Woyzeck 事件の概要である。Büchner は医者である父 Ernst Büchner から、Clarus 博士の Woyzeck 所見書を知らされ、事件の知識を得たとのことである。この素材と作品 *Woyzeck* に関して、Mayer はこう言っている。史実の Woyzeck が告白した言明や、鑑定書に報告された彼の「生活環境」²⁷は、大部分作品に再現されている。が、これは「偉大な劇作家の手法にもとづき」²⁷、作品のなかに芸術的に形象化されている。この Mayer の見解にもあるように、素材は作品 *Woyzeck* と極めて密接な関連にあると同時に、貧乏で悲惨な史実の Woyzeck に注目し、彼を作品の主人公にしたところに、Büchner の民衆に対する基本的態度が反映されているのである。

Ⅲ *Woyzeck* の創作技法について

文学は単なる事実の記録や状況報告ではなく、作者が現実を認識し、想像力を媒介として、自己の内面を言語化したものである。したがって文学作品には、世界に対する作者の態度が、直接的でないにしろ何らかの形で表現され、具現されていると言えよう。そこでまず問題となるのは、作者が作品（自己の内面の矛盾）をいかなる手法で述べているかということである。これに関して、W. Jens が的確に指摘²⁸しているように、作家の道徳にかかわる事柄は、本質的には創作技法の問題に還元されるのである。換言すれば、この創作技法が、究極的には作品の内容や作家の世界観と、密接にかかわってくる。このような意味において、*Woyzeck* に何が書かれているかという内容を洞察する前に、まずどのように書かれているかを考察する必要がある。では以下に創作技法の諸問題について論及する。

a. Shakespeare と Büchner のリアリズム

Büchner の主要作品はほとんど戯曲であるが、彼が戯曲形式を好んだところに、作家としての内的必然性がみうけられる。元来、戯曲は上演することを目的として書かれ、小説より直接大衆に深くかかわるものである。この点に Büchner が戯曲形式を重視した一因があると考えられる。このような大衆の意識への浸透は、演劇の基本構造であり、その意味における偉大な劇作家は、言うまでもなく Shakespeare であった。

周知のように、Shakespeare は戯曲を三統一の方則（1. 所作の統一、2. 場所の統一、3. 時間の統一）、宗教、道徳、教育などから切りはなして、戯曲の自律性を主張²⁹した。これこそ Shakespeare 劇の細部にまで生命の通った人物描写、自然、詩的雰囲気、情念などの詩的具象性を生む所以であった。Büchner 文学にみられる強烈な情念や生命性、人間実存の本質にせまる科白や、人間心理の不気味な深淵などをよりどころにすれば、Büchner と Shakespeare との親近性は明らかである。したがって Shakespeare との関係が、Büchner 文学のリアリティに関する重要な視点となる。Büchner は Gymnasium の時代に、すでに Shakespeare 劇に深く感動し、友人にまでその Shakespeare 熱を感染させたと、学友 W. Luck は報告³⁰している。彼の Shakespeare への傾倒は、Lenz のなかの次の言葉をみれば明白である。

「創作されたものが生命をもっていることは、美醜の上位にあるもので、芸術作品の唯一の基準である。…… Shakespeare にはそれがあり、民謡にあっては完全に、また Goethe にあっても時々それが響いてくる。それ以外の一切は火に投げこんでもよい。」³¹

また Büchner は Gutzkow にあてた手紙でも、こう述べている。「Shakespeare を除いて、すべての詩人は自然や歴史の前では、小学児童のようなものだ……」³²このように彼は、人間らしい強烈な情念と鋭刺たる生気の横溢のみられる Shakespeare 劇を高く評価し、この生命性のなかに芸術作品の本質を見極めようとしたのであった。

Shakespeare を基礎におきつつ、Büchner は創作技法について、次のように述べている。

「……劇作家はわれわれに、歴史をもう一度創作してみせ、味気無い物語のかわりに、われわれをある時代の現実へと移すのである。……劇作家の最高の課題は、現実に生きている歴史に可能なかぎり接近することである。」³³

彼にしたがえば、芸術の本質は、ありのままの現実に肉薄するリアリズムの論理に関連する。一般にリアリズムは、一面では現実の事実や生活の関連性のうちに、生命あふれる文学的リアリティを見る客観主義の芸術論と言える。したがってこれは、客観的な歴史や人物のなかに、人間の本质や根源的なものを追求する創作技法である。思惟や感性、情緒などは、社会的現実から生じるがゆえに、現実に目を向けるリアリズムは、他面ヒューマニズムに発するものと考えられる。ここで Lukács を援用すれば、「偉大なりアリストとして Bücher は、意のままに搾取され、休む間もなくかりたてられ、あらゆるものに虐待された Woyzeck、すなわち当時のドイツの貧民の姿をすばらしく描写した」³⁴ のである。Büchner のリアリズムは、単に事件や歴史を模写するという偏狭なりアリズムではない。「彼のリアリズム理論は、激昂し生命力あふれ、汲めどもつきぬ豊かさで詩的に生活を反映」³⁵ させているのである。けれども注目すべきことに、リアリスト Büchner の想像力は、一面徹底したイロニッシュな姿勢に根ざすものであった。

イロニーの問題は後述することにして、ここで再び論旨を Shakespeare にもどそう。前述のように、私は Büchner が Shakespeare の「生気の横溢」を高く評価したのを見たが、では両者は具体的に、作品のうえでいかなる関係があるのだろうか？ R. Majut は *Über literarische Beziehungen Georg Büchners zu England* のなかで、「*Dantons Tod* や *Leonce und Lena* には、Büchner 自身と同様、Hamlet の言葉が多くみ

られる」³⁶と述べているが、これは十分首肯できるものである。では問題の核心である *Woyzeck* と Shakespeare 劇との関係はどうか？ Majut は「*Woyzeck* には、Büchner がうけた Shakespeare の影響は実証されえない」³⁷と言う。たしかに具体的語句の面からみれば、関連はないかも知れぬが、Majut は表面的次元のみにこだわり、本質を看過しているように思われる。というのも Gundolf の指摘にしたがうならば、*Woyzeck* には Shakespeare 的 „Stimmung“³⁸ が支配しているからである。Shakespeare 劇にみられる Volkslieder の挿入、場面の細分化、イロニー、独白、動機づけから葛藤を経て破局に至るみずみずしい人物描写などが、一読すればわかるように *Woyzeck* にもみうけられる。しかもそれが、単なる垂流にとどまるものではなく、Büchner 特有の独創的生命力が通っているところに、この作品の審美的価値があると考えられる。このような Shakespeare 的 „Stimmung“ は、*Woyzeck* 全体の基調であるが、とりわけ注目すべきものは、Volkslieder の挿入である。

b. *Woyzeck* における Volkslieder の挿入について

Woyzeck にみられる、一見筋とは関連をもたぬ Shakespeare 的 Volkslieder の挿入は、いかなる意味を持っているのだろうか？ Volkslieder のうちに素朴な生命の躍動を見出した Büchner は、例えば婚約者に「復活祭までに Volkslieder を覚えておいてくれないだろうか？……僕が一人でメロディを口ずさんでいると、郷愁のとりこになってくる…」³⁹と書き送っているが、これを見ても彼の Volkslieder 愛唱の一端がうかがえる。この Volkslieder に注目し、そのなかに始原的生命性を見いだしたのは、Sturm und Drang の作家達、とりわけその理論的指導者 Herder であった。同時にこの Herder が、Shakespeare に関する著作を公けにしているのを思いあわせてみると、Büchner は一面この伝統に深く根ざした作家の一人であることが、証明されるのである。

Büchner における Volkslieder の研究として、興味深い問題を提供

してくれたのは、G. L. Fink の *Volkslied und Verseinlage in den Dramen Büchners* である。Fink は Novalis を中心とするロマン派固有の非合理主義、感性中心主義、神秘主義的側面を Büchner 文学のなかに見いだし、とりわけ Volkslieder が「彼をロマン主義者と結合させるもの」⁴⁰ と強調している。また Büchner 文学のロマン主義的側面をより深く洞察した Gundolf は、*Woyzeck* のなかに後期ロマン主義（例えば E. T. A. Hoffmann の作品）にみられる魔的な怪奇性を感得⁴¹している。だが *Woyzeck* にみられるロマン主義的側面は、交錯して複雑多岐にわたる Büchner 文学の一断面にすぎぬ。というのも、*Woyzeck* の Volkslieder の挿入を例にとっても、ここには Volk を基礎におき、民衆の目をとおす Büchner の視点が貫ぬかれているのである。この意味において、Fink も Gundolf も、Büchner のロマン主義的一面に注目するあまり、他の面を看過しているように思われる。

さて *Woyzeck* に挿入された Volkslieder を分類すると、1. 素朴な自然を歌ったもの、2. 愛や性を歌ったもの、3. 生活苦や生のはかなさを歌ったものとなる。はじめに、素朴な自然を歌った Volkslied が挿入されている箇所を引用してみよう。

„ANDRES. *singt.* Saßen dort zwei Hasen,
 Fraßen ab das grüne, grüne Gras…
 WOYZECK. Still! Hörst du's, Andres? hörst du's? Es geht was!
 ANDRES. Fraßen ab das grüne, grüne Gras
 Bis auf den Rasen.
 WOYZECK. Es geht hinter mir, unter mir. … Hohl, hörst du?
 alles hohl da unten! Die Freimaurer!“⁴²

「アンドレース：（歌う）2匹のうさぎがいた

あおいあおい草をたべ…

ヴォイツェク：静かにしろ！ アンドレース。聞えるか？ 聞えるか？

何か動いているぞ!

アンドレス：あおいあおい草をたべた／芝生までも。

ヴォイツェク：わしのうしろだ，下の方だ，…空っぽだ，どうだ？

この下はみんな空っぽだ！ フリーメーソンだ！」

Andres の歌う Volkslied と Woyzeck の精神錯乱の妄想は，素晴らしいコントラストを形成している。と同時に，牧歌的自然と Woyzeck の戦慄的不安の世界の対比は，作品全体の無気味な雰囲気をも極限にまで高める効果を与えていると言えよう。Büchner の芸術観によれば，作品の生命力は美醜の上位におかれる概念であるので，自然と不気味さの対比も，対象のすみずみに生命力を通わせようとする彼の芸術手法である。

次に愛や性に関する Volkslieder の例をあげてみよう。

„Ach, Tochter, liebe Tochter,
Was hast du gedenkt,
Daß du dich an die Landkutscher
Und die Fuhrleut hast gehenkt.“⁴³

ああ，あまっこ，あまっこよ，
あんた何を思って
馬車屋に首ったけ
旅の男に首ったけ？

„Mädel, was fangst du jetzt an?
Hast ein klein Kind und kein' Mann!
Ei, was frag ich danach?
Sing ich die ganze Nacht“⁴⁴

娘っ子，あんたどうするつもり？
ててなし子をこしらえて。
まあ，いじゃないの

わたしゃ夜どおし子守歌。

一般に Volkslieder のなかには、愛や性をテーマにしたものが多いが、これも偶然とは言えぬ。貧困、それゆえの虚無、生の苦痛を担った被抑圧民衆にとって、愛や性だけが彼らに許された夢であり、心情のはげ口なのである。この民衆の情念の呻きや道徳では割りきれぬどろどろとした本能的なものが、愛や性をテーマにした Volkslieder に具現されていると言える。Volkslieder を劇に挿入することによって、Büchner はロマン主義的側面と同時に、民衆の意識の内奥にひそむ性欲や生命の深淵、実存と虚無との渾沌を睨みすえているのである。

また民衆の生活の素朴な心情を吐露した Volkslied もみられる。

„Ins Schwabenland, das mag ich nicht,
Und lange Kleider trag ich nicht,
Denn lange Kleider, spitze Schuh,
Die kommen keiner Dienstmagd zu.“⁴⁵

わたしゃシュヴァーベンにゃいきたくないわ、
長い着物も着たくはないわ、
だって長い着物もとんがり靴も、
女中風情にゃ似合いもしない。

このように、Woyzeck における Volkslieder には Dienstmagd, Landkutscher, Fuhrleut, Soldat, Wirtin, Jäger などが中心に歌われている。これは Volkslieder の特徴でもあろうが、Büchner の下層階級によせる同情や深い関心を、ここに読みとるべきであろう。

では最後に、下層階級のやるかたない心情やはかなさを歌った例をあげる。

„Brandwein, das ist mein Leben,
Brandwein gibt Courage!“⁴⁶

火酒、こいつがおいらの^{いのち}生命、

火酒はわしらが度胸ノ

„Auf der Welt ist kein Bestand,
Wir müssen alle sterben,
Das ist uns Wohlbekannt.“⁴⁷

この世ははかないことばかり、
俺たちみんな死なねばならん、
こりゃ当りまえのことさ。

生の不安、死の必然、生活苦、政治の貧困と不毛、不条理、人間存在の弱さは、「無常」や「諦観」などのニヒリズムとなって、あるいは酒に逃避するといった形をとって、ネガティブに Volkslieder に具象化される。これらは思想のなかに感性として、つまり哲学のカテゴリーのなかに情念として侵入してくる。この民衆の Pathos を Volkslieder のなかに見いだした Büchner は、これを作品に挿入することにより、作品全体を生命力あふれるものにするのである。いわば Büchner は、被抑圧者のバイタリティとニヒリズム のなかに、生の真実を見いだしたとも考えられる。この Volkslieder の挿入は、*Woyzeck* の筋と直接関連性を持っていないとも、主人公 *Woyzeck* の苦痛に満ちた状況の劇的効果を高め、「ペシミズムの力強いコーラス」⁴⁸ の役割をはたす Büchner の芸術手法なのである。Fink が「Sturm und Drang と表現主義や現代戯曲の間に位置」⁴⁹すると指摘した Volkslieder の挿入された劇も、根底においては、Büchner の美学観と深くかかわっていると言わねばならぬ。「青年ドイツ派」と政治的にも美学的にも異質であった彼は、彼らのブルジョア的内面性の限界を越えて、首尾一貫して民衆の立場を堅持していた。ここで Mayer の見解を援用すれば、Büchner の美学観の根底をなすものは、「民衆への加担・人間に対する愛・精神的貴族主義に対する憎悪」⁵⁰ である。したがって、Volkslieder の挿入も究極的には、Büchner の思想的立場に帰着するの

である。

c. *Woyzeck* の言葉と Pathos

Woyzeck を一読すれば理解できるように、言葉そのもののなかに、生命力あふれる Pathos の根源が躍動していると言える。では以下に、強烈な迫力のある *Woyzeck* の独白を引用しよう。

„Immer zu! immer zu! — Hisch, hasch! so gehen die Geigen und die Pfeifen. — Immer zu! immer zu! — Still, Musik! Was spricht da unten?... Ha! was, was sagt ihr? Lauter! lauter! Stich, stich die Zickwolfin tot? — Stich, stich die — Zickwolfin tot! — Soll ich? muß ich? Hör ich's da auch? — Sagt's der Wind auch? — Hör ich's immer, immer zu: stich tot, tot!“⁵¹

「さあやれ! もっとやれ! — びいびい, があがあ! ヴァイオリンと笛めが。 — さあやれ! もっとやれ! — 黙れ, 音楽め! 地面の下で何を言ってるんだ?... くら! 何, 何と言ってるんだ? もっと大きな声で, 大声で言え! — 殺せ, 牝狼を刺し殺せか? — 刺せ, 牝狼を刺し殺せ! — 俺がか? 俺がやらにゃならんのか? あそこでも聞えるんかな? — 風もまたそう言ってるんかな? — ずーと聞えるぞ, さあやれ, 殺せ, 刺し殺せ!」

このように、主として独白の箇所における *Woyzeck* の言葉は、体系的でなく断片的に分断され反復されている。これがかえって根底をつく作用となり、そこに濃縮されたエネルギーが、潜在的力量となって胎動しているのである。*Woyzeck* の内面の相剋は、不気味な „Es“ によって極限にまで高まりをみせているが、Büchner はこの緊迫感を美事な芸術手法で、われわれに提示する。例えば、immer, gehen, Geigen, Pfeifen, still, Musik, spricht, stich, Zickwolfin, ich などの母音は [i], [i], [e], [ai] という強い響を持ち、Hisch, Hasch, still, stich などの [ʃ] や

zu, Zickwolfin などの〔ts〕という摩擦音と相ならんで、音韻面からも律動的で力強い効果を高めている。この意味において、*Woyzeck*には詩的発想があり、長い演説調の科白と *Woyzeck* の断片的独白は、相互に補足しあい、それが一種異様な迫力を生むのである。ことに *Woyzeck*は戯曲であるがゆえに、活字でなく音声を通じて、観客の内面に訴える性質を持っていることを忘れてはならぬ。また *Woyzeck* の文体の特徴である語の反復のなかで、とりわけ „arme Leute“, „immer zu“, „Messer“, „stich“, „rot“, „Blut“, „tot“などは Leitmotiv の役割をはたし、不気味で血なまぐさい暗黒の雰囲気をも昂揚しているのである。

次に *Woyzeck* で特徴的なのは、相反する二つの概念を対置して、両者を強調する手法である。では色彩についての1例をあげてみよう。

„Was bist du so bleich, Marie? Was hast du eine rote Schnur um den Hals? … Du warst schwarz davon, schwarz! Hab ich dich gebleicht?“⁵² (傍線は筆者)

「マリーよ、なんでそんなに青くなったんだ? どうして首のまわりに赤いひもをつけてるんだ? …お前は罪で黒くなってたなあ、まっ黒になあ! わしがお前を白くしてやったのか?」

Woyzeck のなかから、対立する語の主要なものを最初から列挙すれば、次のようである。

„langsam ↔ schwindig, ewig ↔ Augenblick, ein guter Mensch ↔ dumm, Moral ↔ Natur, Tugend ↔ Fleisch und Blut, arme Leute ↔ Herr, schwarze Katzen ↔ feurige Augen, Tier ↔ Professor, ein arm Weibsbild ↔ die großen Madamen, höllenheiß ↔ eiskalt, Ja ↔ Nein, der lange Schlingel ↔ der Kuyze, schön ↔ Sünde, frieren ↔ heiß, blutig ↔ blaß, u.s.w.“⁵³ (傍線は筆者)

このような対立する概念は、*Woyzeck* の精神錯乱の世界、貧困と富裕、悟性と感性、精神と肉体、善と悪、美と醜、真理と虚偽などの相剋する側

面よりなる、人間存在の具体的実体の表現にほかならぬ。

さて、この相反する概念を対置する手法は、Büchner のイロニーと深く関連していると言える。例えば *Woyzeck* の根底を流れる「グロテスク」や「暗黒の深淵」も、古典的美に対する Baudelaire 風のイロニーであろう。では具体的に、「教養」に対するイロニーの箇所を引用してみる。*Woyzeck* のなかでロバをひきまわしながら口上役は：

「おい、能力を発揮しろ！ 畜生的理性をな！ 人間社会に赤恥をかかせろ！ さてみなさん、御覧の四つの蹄と尻尾をもったこの動物は、あらゆる学会の会員で、わが大学の教授でもあります。」⁵⁴

と解説する。また口上役は、兵隊の身なりをした猿に向かって「そら、次は男爵さんだ」と皮肉をこめて言う。このイロニーの箇所と、Büchner の次の言葉は美事に一致しているのである。

「教養とよばれる笑止な外面や、また学識という名の無用のがらくたをもって、われわれ同胞大衆を、さげすむべきエゴイズムの犠牲にする多くの人間がいます。この貴族主義は、人間に宿る聖霊に対する、最も恥ずべき侮蔑です。」⁵⁵

あくまで大衆の立場にたった彼は、みにくい現実や疎外を隠蔽する虚飾に満ちた「美しい花」——教養や貴族主義——を否定すると同時に、これを作品にイロニーという形で表現している。Büchner の用いるイロニーの手法は、彼の文学の本質的要素の一つであって、いわゆる彼の想像力にかかわる問題となってくる。したがって彼の全作品を通じて看取されるこのイロニーは、Büchner 文学に豊饒な生命性を与えているのである。

視点を変えよう。Mayer が指摘⁵⁶ するように、*Woyzeck* はプロレタリア文学の先駆的作品であるがゆえに、主人公の使う言葉も文章語ではなく、民衆の言葉である。この言葉の問題は、Büchner の世界観とも深く結びついているだけに、ここでまず方言について言及する必要があるだろう。

K. Brinkmann は *Woyzeck* の方言について、こう述べている。*Woyzeck*

を起草するにあたり「その際 Büchner は方言を用いたが、しかしそれは一定の方言に相応するものではない。彼は Hessen や Elsaß 地方の方言要素と、標準語をむすびあわせた。」⁵⁷異邦人であり、方言について全く素人の私には、これについて多く語る資格はないが、顕著に目だつ箇所のみ引用してみよう。下層階級 (Woyzeck, Marie, Margret) と、教養階級 (Hauptmann, Doktor) の nicht の使い方をみる意味で、それぞれの科白を抜粋してみた。

„WOYZECK. — ich hab's noch nit so aus.“

「ヴォイツェク：そいつが十分ねえんでさ。」

„MARIE. Mein Vater hat mich nit anzugreifen gewagt, …“

「マリー：お父っつあんだって、手出しをしようとしなかったのさ…」

„MARGRET. So was is man an ihr nit gewohnt.“

「マルグレート：あんたにしちゃあめったにないことね。」

„HAUPTMANN. Herr Doktor, erschrecken Sie mich nicht.“

「大尉：ドクター、驚ろかさないで下さいよ。」

„DOKTOR. Hab ich nicht nachgewiesen, …“⁵⁸

「医者：私が指示しなかったかな…」

(以上の傍線はいずれも筆者)

この例で明白のように、Büchner は下層階級の人々に民衆の言葉を、教養階級の人々に標準語をしゃべらせ、意図的に区別している。この効果的な言葉の使いわけは、登場人物のおかれた境遇の差をくっきりと浮彫にしている。虫けらのように地面を徘徊している貧民の言葉のなかに、真実の人間の赤裸々な姿をみた Büchner は、標準語を使う大尉や医者をつかりカチュアとして描き、ブルジョアの教養の虚飾性を暴露するのである。ここにあげた例は nicht と nit のコントラストであるが、他に nichts と nix, ist と is, Sie と Er などの対比的用法もみられる。

周知のように、自然主義では民衆の言葉や方言の使用が、創作上大きくクローズアップされるようになった。が、それより半世紀も前に、Büchner がこれに着眼したことは、彼の近代性と独創性を証してあまりあるものである。確かに Büchner 以前の作家（例えば Hans Sachs など）にも、民衆の言葉の使用はみられる。しかし Büchner の場合、常に階級的視点に立っているところに、彼の斬新さがあると言えよう。したがって G. Hauptmann や Wedekind などが Büchner を高く買う所以も、彼の創作技法——階級的視点にもとづく民衆の言葉の使用——にあった。Mayer も Büchner 文学のなかに、*Die Weber* を書いた Hauptmann, E. Toller, F. Wolf にはじまるプロレタリア的叛逆のドラマの嚆矢をみている。⁵⁹とりわけ Büchner と Hauptmann は環境の客観描写、決定論的要素、血と肉を持っている人間の暗黒面の描写という点で、共通する特色がみうけられる。けれども両者のおかれた社会状況の相違によるプロレタリアの把握の差もさることながら、両者を分つ本質的相違は、リアリズムの手法であった。自然主義のリアリズムは、現実を再現することであり、19世紀の意味における実証主義的な、かつ即物的なリアリズムである。が、これに対して Büchner のそれは、想像力を媒介として、客観的に現実を洞察して、うつぼつとした Pathos が、断片の美学としてその作品の根底を貫流しているのである。このような意味から、Büchner 文学は自然主義の限界を越える側面があったと言っても過言ではない。

ところで、彼の下層階級に対する同情は、登場人物の名前を一瞥しただけでも明らかとなる。Woyzeck, Marie, Andres, Margret, Käthe, Karl などの一連の名前は固有名詞である。一方、Hauptmann, Doktor, Tambourmajor, Unteroffizier などは、職業を表示する普通名詞が、そのまま名前となっている⁷⁰。言いかえると、社会の下層階級である貧民には名前があり、ブルジョアの階級には名前がないのである。人物設定におけるこれらの意識的な使いわけは、従来の古典劇とは全く正反対とも言うべき

であり、Büchner のイロニーとも考えられる。これは Büchner 固有の階級意識にもとづくものであって、畢竟彼の世界観に究極の根をもつものである。

民衆の言葉の使用にともない、必然的に卑猥な表現が随所にみられる。例えば Woyzeck は次のように独白する。

「転がりまわれ！なんで神様はみんなが淫らに重なりあって転がれるように、お日様をなくして下さらんのか。男と女が、人間と畜生とが？
真^ま昼^つ間^{びる}からそいつをやれ、蚊が手のひらに吸いつくようにやったれ！
売女め！ あいつはかっかとほてとるな！——そらやれ、もっとやれ
！」⁶⁰

また他の箇所では表現されている、卑猥な言葉や下品な言いまわしを列挙すれば、次のようになる。

「あんたは男の革ズボン七枚も見とおしでさ」、「売女…しがない女郎の子」、「さあ、では十字架に小便をしよう。キリストが死ぬように」、「肛門に鼻先をめりこませたる！」、「野郎、貴様の舌をのどからひっこぬいて、体に巻きつけてもらいたいんか？」、「婆^{leif}あの尻」⁶¹

これに関して *Dantons Tod* の卑猥な表現や、下品な言葉に対する Büchner の弁明が興味深い。彼は手紙のなかでこう述べる。

「僕が彼らの放蕩を描写しようとすれば、どうしても彼らが放蕩しているように表現せねばなりません。彼らの背信を描写しようと思えば、また無神論者らしくしゃべらせなければならなかったのです。二、三の猥褻な表現もありますが、当時の周知の破廉恥な言葉を想起してごらん下さい。…詩人というものは、道德の先生ではなく登場人物を創作し、過去の時代を再現するものです…」⁶²

以上の手紙から理解できるように、卑猥な表現や下品な言葉も、方言と相並んで本質的には、人間の生態や獣性を赤裸々に露呈⁶³する、Büchner 固有のリアリズムの理論に由来するのである。かくして今までこれら

を隠蔽してきたキリスト教的、貴族主義的道德律や、理性中心の世界観の欺瞞性に対する告発が行なわれるのである。

ところで、医学を専攻する自然科学者であった Büchner は、「ニゴイの神経系に関する覚書」という論文を Zürich 大学に提出し、学位を得た。23歳の若さで Zürich 大学の講師となり、解剖学を講じたこの事実から、自然科学の分野における彼のすぐれた才能も、疑う余地はない。解剖学者の冷徹な目で世界を洞察した Büchner は、いわゆる Jens の言う「生物学的な見解」⁶⁴ と「社会学的な見解」⁶⁴ を相互不可分に関連させ、*Woyzeck* を書いたのである。このような理由で、*Woyzeck* にも自然科学用語が多くみられる。その例として次の言葉をあげてみよう。

„der Musculus constrictor vesicae“ 「膀胱括約筋」 „Harnstoff 0, 10, salzsaures Ammonium, Hyperoxydul“ 「尿素 0.10, 塩化アンモニウム, 過酸化物」 „mein Puls hat seine gewöhnlichen 60“ 「私の脈は平常の60だ。」 „Aberratio mentalis partialis“ 「局部的精神錯乱」 „Zweite Spezies; fixe Idee mit allgemein vernünftigen Zustand“ 「第二期症状つまり正常の理性的状態をともなった固定観念」⁶⁵

このように従来文学とは異質であった医学用語が、Büchner によって大胆にも *Woyzeck* に移入されたのである。周知のように20世紀に入ると、この用語は文学の領域に滲透してきた。例えば G. Benn の世界がそうである。

„Als man die Brust aufbrach, war die Speiseröhre so löcherig.
Schließlich in einer Laube unter dem Zwerchfell
fand man ein Nest von jungen Ratten.

Ein kleines Schwesterchen lag tot.

Die andern lebten von Leber und Niere,
tranken das kalte Blut und hatten“ (Schöne Jugend)

「その胸を裂りひらいてみると

食道はどこも孔だらけ
横隔膜のしたの空洞に とうとう
みつけた 仔鼠どもの巢
ちびの鼠は死んでいた
ほかのやつらは肝臓や腎臓をくらって
命ながらえ 冷えた血をすすり」⁶⁶（深田甫訳）

このような解剖学的用語を用い、医者を目で死体を描写する Benn のリアリズムは、冷たく虚無的な美を放っている。この Benn の詩を相照してみても、Büchner が自然科学的言葉とその洞徹力という点で、いかに現代的な作家であったかが、おのずから理解できよう。前述の「民衆の言葉や方言」、「卑猥な言葉」、「解剖学的用語」などの一連の表現は、古典的美意識——花鳥風月、高貴な人間、神、愛、Kant 的眞善美——の世界と激しく対立するものである。したがって、社会の下層に徘徊する貧民、グロテスクなもの、ekelhaft なものを題材として、社会の痛みを鋭く洞察したところに、Büchner 文学の独創性と斬新性がある。

Woyzeck の言葉や文体を追求してゆくと、必然的に 20 世紀文学の領域と深くかかわらざるをえない。例えば、表現主義との関連をみる意味で、Woyzeck が Marie を殺害する場合と、G. Heym の詩を比較してみよう。

„MARIE. Was der Mond rot aufgeht!

WOYZECK. Wie ein blutig Eisen.

MARIE. Was hast du vor? Franz, du bist so blaß.“⁶⁷

（傍線は筆者）

「マリー：なんて赤い月がでたのかしら。

ヴォイツェク：血のりのついた刃物のようだな。

マリー：何を考えてんの、フランツ？ 青い顔をして。」

この rot と blaß の対比は、殺人を予感させると同時に、この場の不

気味な雰囲気高め、強烈な印象を強める役割をはたしており、ここに Büchner の鋭く研ぎ澄まされた詩的発想が看取される。Heym の *Der Krieg I* のなかにも、次のような詩節がある。

„In die Nacht er jagt das Feuer querfeldein
Einen roten Hund mit wilder Mäuler Schrein.
Aus dem Dunkel springt der Nächte schwarze Welt,
Von Vulkanen furchtbar ist ihr Rand erhell.“⁶⁸

(傍線は筆者)

(大意) 「戦争は野面を横切り、火を夜へと狩りたてる。

野鼠の鳴声をした赤い犬を。

暗がりより、夜の真暗闇の世界が生れてくる。

その縁は、火山によって不気味に映える。」

この色彩の対比や、血なまぐさい暗黒世界の描写からも理解できるように、*Woyzeck* と Heym の詩の類以は一目瞭然である。それゆえに *Woyzeck* の世界は、表現主義特有の魂の内奥の戦慄と、異様な色調の世界に通ずる一面を持っていると言える。と同時に、表現主義はシュールリアリズムとも密接な関係を有しているので、この意味からも、Büchner 文学から現代文学的要素を抽出することは可能であろう。が、ここでは上述の例で Büchner の近代性の側面を論証することは十分であり、これ以上述べるのは、この章の主旨とも逸脱すると思われるので割愛する。要するに Büchner は、自然主義やプロレタリア文学の先駆者であり、またこれらの芸術潮流とは異質であった表現主義にも通ずるといって、多くの顔を持った特異な作家であることがわかるであろう。

以上、拙論では主として *Woyzeck* の素材、形式、言葉などについて論及したが、これらの諸問題をとりあげたのも、Büchner 文学の錯綜し、複雑であたかも人生そのもののような多くの顔をもった側面を、多面的

に把握しようと意図したからである。この考察から、Büchner 文学は彼の社会体験から発し、極めて現代文学的性格を持っていること、*Woyzeck* の人間実存の究極の意味をえぐり出す科白や、豊饒な生命性も、彼の創作技法（言葉）に由来することなどが理解されよう。したがって Büchner は、時代のもっとも根源的なものに到達することによって、それを突きぬけ、他の同時代のものには到底およばぬ、問題意識の深みに達していたと言っよう。次稿ではこれらの問題をより深く掘り下げ、社会的、歴史的視点より Büchner の変革への情熱に焦点を合せ、「疎外」、「ニヒリズム」の問題をとりあげようと思う。というのも、いみじくも Mayer⁶⁹が強調するように、Büchner 文学解釈は根底的には、研究者の世界観自体の問題に帰着するからである。（この稿続く）

Text Georg Büchner: *Werke und Briefe*. Deutscher Taschenbuch Verlag. Hrsg. von Fritz Bergemann, München 1967. 訳文については、手塚富雄、千田是也、岩淵達治監修の『ゲオルク・ビューヒナー全集』河出書房、1970年を参照した。

注

- 1 vgl. *Georg Büchner*, Hrsg. von W. Martens, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt 1965, S.72 ff.
- 2 vgl. K. Viëtor : *Georg Büchner*, Bern 1949.
- 3 vgl. *Georg Büchner*, a. a. O., S.82 ff. および S.373 ff.
- 4 vgl. *ibid.*, S.406 ff.
- 5 vgl. H. Mayer: *Georg Büchner und seine Zeit*, Berlin 1960.
- 6 vgl. *Georg Büchner*, a. a. O., S.197 ff.
- 7 vgl. H. M. Enzensberger: *Deutschland, Deutschland unter anderm*, Frankfurt 1968, S.99 ff.
- 8 *Heines Werke*, Hrsg. von den nationalen Forschungs- und Gegenstätten der klassischen deutschen Literatur. Weimar 1970, 4. Bb., S.188.
- 9 西谷啓治『ニヒリズム』, 創文社, 昭和45年, 20ページ参照.
- 10 K. Marx: *Zur Kritik der Hegelischen Rechtsphilosophie*, Marx Engels Werke, Berlin 1958, 1. Bd., S.380.

- 11 Text, S. 159.
- 12 Text, S. 179.
- 13 *Georg Büchner*, a. a. O., S. 212.
- 14 Text, S. 188.
- 15 Text, S. 191.
- 16 vgl. Text, S. 163.
- 17 Text, S. 133. *Der Hessische Landbote* の冒頭に引用されているこの語句は、
仏革命の標語であった。
- 18 Text, S. 133 f.
- 19 H. M. Enzensberger, a. a. O., S. 119.
- 20 H. Mayer: *Georg Büchner, Woyzeck*, West-Berlin 1970, S. 60.
- 21 ibid. S. 61.
- 22 Text, S. 33.
- 23 この事件については, H. Mayer: *Georg Büchner und seine Zeit*, a. a. O., S. 321 ff. H. Mayer: *Georg Büchner, Woyzeck*, a. a. O., S. 75 ff. K. Viëtor: *Georg Büchner*, a. a. O., S. 197 ff. K. Brinkmann: *Erläuterungen zu Georg Büchners Dantons Tod und Woyzeck*, Bange Verlag, S. 54 ff. を参照。
- 24 H. Mayer: *Georg Büchner und seine Zeit*, a. a. O., S. 322.
- 25 ibid. S. 324.
- 26 ibid. S. 325. 史実の Woyzeck も上官から, この言葉でからかわれた。
- 27 ibid. S. 327 f.
- 28 vgl. W. Jens: *Literatur und Politik*, Verlag Günther Neske Pfullingen 1963, S. 29.
- 29 飯塚友一郎『演劇学序説』雄山閣, 1960年, 60—71ページ参照。
- 30 vgl. Text, S. 302 f.
- 31 Text S. 72.
- 32 Text, S. 174.
- 33 Text, S. 181.
- 34 *Georg Büchner*, a. a. O., S. 216.
- 35 ibid. S. 217.
- 36 ibid. S. 336.
- 37 ibid. S. 338.
- 38 vgl. ibid. S. 89. : „Zwischen dunkler Lebenskraft und heller Sinngebung führt er ein Dasein der >Stimmungen<,...“
- 39 Text, S. 198.
- 40 *Georg Büchner*, a. a. O., S. 443.

- 41 vgl. *ibid.* S. 90. : „Erfinderisch ist er im geschlechtlich Grotesken und Gruseligen, kraft einer sozusagen medizinischen Romantik.“
- 42 Text, S. 115.
- 43 Text, S. 131.
- 44 Text, S. 116.
- 45 Text, S. 131.
- 46 Text, S. 127.
- 47 Text, S. 116.
- 48 *Georg Büchner*, a. a. O., S. 457. : „Zusammen genommen ertönen die Lieder schließlich als einstimmiger Chor des Pessimismus.“
- 49 *ibid.* S. 487.
- 50 *ibid.* S. 436.
- 51 Text, S. 125.
- 52 Text, S. 132.
- 53 Text, S. 113 ff. 原文のまま.
- 54 Text, S. 117.
- 55 Text, 165.
- 56 vgl. H. Mayer: *Georg Büchner, Woyzeck*, a. a. O., S. 68.
- 57 K. Brinkmann: *Erläuterungen zu Georg Büchners Dantons Tod und Woyzeck*, a. a. O., S. 71.
- 58 5つの例文は, Text, S. 114 ff.
- 59 vgl. H. Mayer: *Georg Büchner, Woyzeck*, a. a. O., S. 68. : „Dann wäre Büchners fragmentarisch gebliebenes Schauspiel nicht bloß als erste Absage an die Darstellung ausschließlich bürgerlicher Existenzen im deutschen Drama aufzufassen, sondern als Vorläufer der *Weber* von Gerhart Hauptmann und aller späteren Dramen der proletarischen Revolte seit den Frühwerken eines Ernst Toller oder Friedrich Wolf.“
- 60 Text, S. 125.
- 61 Text, S. 116 ff.
- 62 Text, S. 182.
- 63 ここで *Woyzeck* とコントラストをなすものとして, J. P. Sartre の『黒いオルフェ』を想起されたい。ネグリチユードのもつ「断ち切られた蛆虫のように塵埃の中で身をよじる」どろどろとした生命力——獣性——を Sartre は実存的自己超越, すなわち革命的实践のエネルギーとみている。これに反し, *Woyzeck* の獣性は宿命論的絶望の深淵に沈潜しており, ここに Büchner の時代的限界があると見えよう。
- 64 『ゲオルク・ビューヒナー全集』前掲書, 535ページ。

- 65 Text, S. 119 f.
66 『G. ベン詩集』：深田甫訳，ユリイカ，1959年，23ページ。
67 Text, S. 130—131.
68 G. Heym: *Dichtungen*, Reclam, Stuttgart 1964, S. 12.
69 vgl. H. Mayer: *Georg Büchner und seine Zeit*, a. a. O., S. 475 f.
70 vgl. H. Mayer: *Georg Büchner, Woyzeck*, a. a. O., S. 63.

Zum Problem der Darstellung in Georg Büchners *Woyzeck*

—erklärt im Licht seiner Weltanschauung—

Takashi Hamamoto

Man ist vor die schwierigste Aufgabe gestellt, Georg Büchners Werk in seiner ganzen Komplexität zu beleuchten, dessen Aktualität heutzutage unter den verschiedenen Perspektiven zum besonderen Thema geworden ist. In diesem Aufsatz habe ich *Woyzeck* zum Ansatzpunkt zu weitergehenden Betrachtungen gemacht, um möglicherweise zu einer einheitlichen Büchner-Deutung zu kommen.

Büchner hat als junger Revolutionär an der Studenten-Bewegung der damaligen Zeit aktiv teilgenommen. Diese sachlichen Erfahrungen liegen auch dem Fragment *Woyzeck* zugrunde, in dem Georg Büchner als Schöpfer des *Woyzecks* immer da mitleidvoll auf Seiten des armen Helden steht, wo dieser auftritt. Hierbei kommt es dem Dichter Büchner primär darauf an, die Fülle des Lebens möglichst realistisch zur Gestaltung zu bringen. Aus dieser Untersuchung ergibt sich, daß im *Woyzeck* inhaltlich

die Werke von Naturalismus wie auch Expressionismus schon vorweggenommen worden sind. Darin kann man sein höchst modern zugespitztes dichterisches Bewußtsein erkennen. Die Darstellungstechnik steht in untrennbarem Zusammenhang mit dem gedanklichen Inhalt des Dramas. Sehr zutreffend hat Hans Mayer festgestellt, „daß Auseinandersetzung mit Gestalt und Werk dieses Dichters in eminenter Weise zu einem Weltanschauungsproblem geworden ist.“ In dieser Hinsicht beabsichtige ich gelegentlich als Fortsetzung dieses Aufsatzes das Problem des Nihilismus und der Entfremdung zu behandeln, das in diesem Drama künstlerisch konkretisiert ist.

(Fortsetzung folgt)